

# ルソー『孤独な散歩者の夢想』における 「幸福」と「自己」についての一考察

泉 敏 夫

『エミール』が禁書処分にあい、『社会契約論』が異端視されたルソーは、自らの教説を正当化するために、1765年より『告白』の執筆にはいる。1770年末にその第2部を完成したが、出版はもとより、その朗読会も思いのままにはこばないのを見て、ルソーは、もはや社会が哲学者達に扇動され、広範な陰謀を企てて彼を陥れようとしているのだと思ひこむ。そして『現代のすべての人は、私ひとりだけが育てている物の感じ方のうちに、誤謬と偏見しか見ない。彼らは、私の体系とは反対の体系のうちに真理と確証を見出している』<sup>1)</sup>(〈第3の散歩〉)と考えた上、彼はもはや同時代の人々に理解されようと思わず、『対話、ルソーはジャン＝ジャックを裁く』という3つの対話を4年間(1772－1776)にわたって書く。これは、後世の人々に対し自らの正当化をはかろうとする自己分析・自己弁護の絶望的な努力の作品である。しかし彼は『告白』と『対話』のあと、ますます同時代の人々とのへだたりが大きくなって行くことを感じるとともに、被害意識が加わり行き、後世の人々にさえ自分の思想が正しく伝わることの難しさを悟り、完全な隠遁の中に、自己の内面に沈み、魂の平静と幸福を得ようとする。このようにして、1776年秋から10の「散歩」よりなる『孤独な散歩者の夢想』(*Les Rêveries du promeneur solitaire*)が生まれたのである。ここで、彼は自己の分析を実に精細に行っており、それはわれわれに彼の魂の内奥まで示すばかりでなく、また孤独の灰色のヴェールで蔽われているとはいえ、「自己」の存在感情的確な把握と彼の味わった「幸福」感の鮮やかで密度の濃い表現が見られる。

この小論は、人間の持続的な「幸福」の探究をその主要なテーマとしている〈第5の散歩〉と〈第7の散歩〉における「幸福」の内容と「自己」の特質を

浮彫りにすることを目的とする。1では、両〈散歩〉を通して、「幸福」またその成就のための条件・方法、つまりその過程について分析し、両〈散歩〉の相違点があれば、それを明らかにし、その理由も考察したい。2では、両〈散歩〉における「幸福」および、その状態にある「自己」の様態を比較・分析する。この際、研究家の意見に検討を加えながら、ルソー晩年の「幸福」および「自己」の特徴を考察したい。

## 1

〈第5の散歩〉は、彼が1765年にのがれていたサン・ピエール島（スイスのビエヌ湖上に浮ぶ）での静寂と自然の中で、心ゆくまで幸福に浸った時の回想である。ルソーはこの島で『二ヵ月も過ごすことは許されなかったのだが、私と妻とは、管理人夫妻と召使たちのほか誰も話相手はなかったといえ、2ヵ年を、2世紀を、いや永遠に過ごしたとしても、一瞬も退屈することはなかったであろう』<sup>2)</sup>と思うほど、この上ない幸福感を味わったのである。そして彼は『…舟にひとり乗り、水の穏やかな時には湖の真中に漕いで行く。そこで目を天空に向け、舟に身を横たえながら、ただように任せ、ときどき幾時間ものあいだ水のまにまに漠然とはしているが、えもいわれぬ様々の夢にふける。』<sup>3)</sup>そして『ある単純で、永続的な状態であり、そのなかに激しい何物もないが、その持続は魅力を増して』行くこの上ない「幸福」を見出すことができたのである。この時、「自己」をどのようにルソーは感じたか。『ただ私たちが存在するという感情だけしかなく、この感情だけが魂全体を満たすことができるような状態がつづく限り、そこにある人は幸福な人と呼ぶことができよう』<sup>4)</sup>とのべられているが、ここでルソーが「自己」の存在を感情によってとらえていることに注目すべきであろう。

では、「幸福」はいかにして得られるか。つぎに、その条件をたずねてみよう。第一に『心情は平静にたもたれ、いかなる情念もその平静を乱すことはあってはならない。』<sup>5)</sup>第二に「周囲の事物の協力」が必要であり、第三に『絶対の休息も、過度の心の乱れがあってはならず、動揺や断続のない一定不変のほ

どよい運動が必要』<sup>6)</sup>である。しかしこの「運動」も『不規則であるかあるいは激し過ぎると、心情は目ざめて、周囲の事物をわれわれに思い出させて、夢想の魅力を台なしにしてしまい…瞬時に偶然と人間界の束縛のもとにわれわれを連れ戻し、われわれを不幸の感情へとおいやってしまう。』<sup>7)</sup>従って「動揺や断続のない一定不変のほどよい運動」(«un mouvement uniforme et modéré qui n'ait ni secousses ni intervalles»)が、「夢想」をもたらす条件の一つなのである。しかし以上の三つだけでは、われわれを「幸福」にみちびくことにはならない。ルソーの分析に耳を傾けよう。『絶対的な沈黙も、悲しみにみちびく。それは死の影を見せる。だから快い想像力の救いが必要であり、想像力を天より恵まれた人にとっては、この救いはごく自然にあらわれる。この時外部からくるのではない運動が、われわれの内部につくられる。(«Le mouvement qui ne vient pas du dehors se fait alors au dedans de nous.») たしかに、その休息はささやかなものであっても、まことのものであり、軽やかで甘美な想念が魂の奥底を乱すことなく、いわばその表面を軽くふれるとき、一層快い。すべての不幸を忘れて自分のことだけを思い出すに足る休息が得られればよい。』<sup>8)</sup>以上のように、別の条件を求めながら「幸福感」を得るまでの過程を、長文にも拘わらず引用によって示したが、これをまとめるならば、つぎのごとくなるであろう。まず、内的条件として、一切の情念は不必要である。つまり心情を平静にたもつことが肝要である。つぎに「一定不変のほどよい運動」が必要であるが、このためには周囲の事物の協力が不可欠である。これは外的条件と考えることができる。内的条件に加うべきものとして、「想像力の救い」があげられる。この力は、悲哀と死の影を人々にもたらす絶対の沈黙をさけるはたらきをする。しかも「想像力」はわれわれの内部に運動を惹き起し、これから生じる「軽やかで甘美な想念」が「魂の表面」にかすかに触れるのである。

このようにして、「幸福」な状態をもたらす二つの条件として、外的運動と内的なそれ(引用どおり、両者は«mouvement»として表現されている)を指摘することができる。この両者が同時的であり、結合することによって、真の

「幸福」な状態が成就すると思われる。

ではこの時、「自己」はいかなる様態を示すか。ルソーはつづける。『魂がそこに安住し、また自らの全存在を集中するに足る土台をみいだして』<sup>9)</sup>、過去の思い出も未来に対する懸念もなく、欠乏、享受、苦しみなど一切の感情を伴わず、『ただ私たちが存在するという感情だけしかなく、この感情だけが魂全体を満たすことができるような状態』<sup>10)</sup>に達した場合、「幸福者」と呼ばれるのであるが、この状態で人は何を楽しむのか。ルソーは答える。『自己の外部にある何かでもなく、自分自身と自分の存在以外の何かでもない。この状態がつづく限り、人はあたかも神のように自ら充足するのである。』<sup>11)</sup> «De rien d'extérieur à soi, de rien sinon de soi-même et de sa propre existence, tant que cet état dure on se suffit à soi-même comme Dieu.») このように、人が「自分自身」となった時、「彼」は自己が存在することを感じ、充足することができる。しかしこの場合、「自己」はただその存在表明に過ぎないのか。それとも「充足」するに足る内容をそなえているのか。またひじょうに局限されていて、世界から隔絶されたものであるのか。この問題は本稿2で考察されるであろう。

さてルソーは、〈第5の散歩〉の終り近くにおいて、サン・ピエール島での折角得られた無上の楽しみを、いつまでも意のままに自分の力で呼び起し得ないという慨歎を洩らし、『不幸なことに想像力が衰えてくるに従って、そういう状態を味わうのが困難になり、しかも長くつづかない』<sup>12)</sup>という告白で、同《散歩》を閉じている。

われわれは以上のごとく〈第5の散歩〉の分析をしたが、つぎに〈第7の散歩〉における「幸福」と「自己」のあり方の考察に移りたい。

この〈散歩〉では、「想像力」の衰えという内的な変化に応じて、ルソーは新しい方法を見出している。『突然、65才をすぎたころ、わずかにとどめていた記憶もうすれ野原をかけまわる力を残していたのにそれもなく、案内者はなく、書物もなく、庭もなく、標本もないのに、私はこの熱にまたとりつかれた。』<sup>13)</sup>「この熱」とは植物研究である。われわれはこの変化が、ルソーに

なぜあらわれたか、また彼の「自己」探究の道においていかなるはたらきをなしたのかを究明しながら、〈第7の散歩〉における「幸福」感の分析をこころみたい。先述したように、「想像力」の衰えを自覚した彼は、その力の暗い否定的なはたらきにもふれている。『夢の真中においても、不幸に脅かされた私の想像力が、その不幸の面に活動を向けはしないか、そして私の苦悩のたえない感情が私の胸をだんだんしめつけながら、ついにその重みで私を押し潰しはしないかと恐れなければならなかった。』<sup>14)</sup> このように「想像力」は、「私」を惨めな状態から救いだすどころか、却ってその方向に私を導き、苦悩の底に落とし入れる。この時、「私」の内面で新しい動きが生まれてくる。『…私に生まれつきそなわったある本能が、私におよそ痛ましい観念を遠ざけさせ、私の想像力に沈黙を命じ、私を取り巻く対象に注意を向けさせ、自然の光景を初めて私にくわしくしらべさせてくれた…( « Dans cet état, un instinct qui m'est naturel me faisant fuir toute idée attristante imposa silence à mon imagination, et fixant mon attention sur les objets qui m'envi-onnaient me fit pour la première fois détailler le spectacle de la nature, … » )<sup>15)</sup> 』のである。ここで明らかなことは、「想像力」が沈黙を命ぜられ、その代わりに、「私」は『取り巻く対象に注意を向ける』ことになる。ここにわれわれは、ルソーの意識の新しい活動を見出すのである。つまり「私を取り巻く対象」への注意が具体的に植物研究にその成果をあらわすという点と、彼の意識の中で「注意」という外向性がはたらいたという点で新しいのである。なぜならば、〈第5の散歩〉において、湖水の波と響きがもたらす「連続した一定の運動」、つまり彼を取り巻く自然の運動は、『私の魂の積極的な協力を全く必要とせず、( « sans aucun concours actif de mon âme » ) 私を強く結びつけ』たことを想起すれば、〈第5の散歩〉における自然に対する受容的態度とは反対の積極的な態度が、ルソーの意識の新しい変化を意味するといわねばならない。

このようにして、〈第5の散歩〉では、「夢想」の要因が「想像力の救い」であったのに対し、〈第7の散歩〉では、自然に対する「注意」によって『甘

美で深い、ある夢想が静観する者の官能を支配し、彼は、得もいわれない陶醉の中に、この広大な美しい体系の中に自ら消えゆき、それと同化する自分を感ずる』<sup>16)</sup>のである。そしていまや、「想像力」は自制して、『取り巻く事物のもたらず軽やかなしかし快い印象に私の官能がゆだねられることを認める。』

では「想像力」は全くその機能を失ってしまったか。そうではない。『輝く花よ、五色の草原よ、爽やかな木陰よ、このようなすべての醜いものでけがされた私の想像力をきよめにきてくれ』<sup>17)</sup>と希求するルソーは、「想像力」の本来の機能を、植物研究を媒介として再生しようとはかる。〈第7の散歩〉の終りの一節はそれを告げている。『…植物学は私の想像力を一層たのしませるあらゆる観念をよせ集め、呼び返す。』<sup>18)</sup>

最後に〈第7の散歩〉における「自己」の様態にふれたい。ルソーは『私が自分自身を忘れる時ほど、快く瞑想し、夢みることはない。私はいわば、さまざまな存在の体系の中に、溶けこみ、自然と同化することに、名状しがたい陶醉と恍惚をおぼえる。』<sup>19)</sup> ( «Je ne médite, je ne rêve jamais plus délicieusement que quand je m'oublie moi-même. Je sens des extases, des ravissements inexprimables à me fondre pour ainsi dire dans le système des êtres, à m'identifier avec la nature entière. » ) とルソーはのべている。この自己認識、「陶醉」感にある「自分自身」は、「私」の完全な忘我の状態を示すものなのか、「私」の一面なのかをしらべる必要があろう。いずれにしても、ここで、『私が自分自身を忘れる時ほど、快く瞑想し…』といわれているが、〈第5の散歩〉における『人は自ら充足する』という「自己」の様態と比較すると全く対立しているように見える。この問題は2で考察することとする。

以上の通り、両〈散歩〉における「幸福」の状態に達するまでの過程に焦点をあてて、その条件と方法の相違を明らかにし、あわせて各〈散歩〉の「自己」の様態の特徴をあげたが、つぎに、はたして、両〈散歩〉における「幸福」とその状態にある「自己」が同内容のものかどうかを考察したい。

アンリ・グイエが『ジャン＝ジャック・ルソーの形而上学的省察』において、両〈散歩〉の「幸福」および「自己」の様態について論じているので、先ずその解釈を見ることにしたい。

〈第5の散歩〉の「陶醉感」(«extase» )における「自己」のあり方、つまり『この状態がつづく限り、人はあたかも神のように自ら充足するものである。』(本稿18頁参照)に基づいて、グイエは、『〈第5の散歩〉の「夢想」は「自己中心的」陶醉感のそれである。』<sup>20)</sup>(«La .«rêverie» de la Cinquième Promenade est donc celle d'une extase égotiste. » )と規定し、ついで、〈第7の散歩〉のそれに関してはつぎのごとくのべている。『しかし自然は、ただ自己の探究に適切な舞台のみではない。それは宇宙の諧調をあらわす、ある諧調の啓示であり、宇宙の諧調の真中において、「私」は存在することを感じる。別の言葉でいえば、「私」の存在は世界のそれからもはや切り離されることはないであろう。』<sup>21)</sup>そして、さらに本稿前頁に触れた、「静観者」と「美しい体系(自然)」との一体化に関し、グイエは次の通り解釈している。『「自ら(その美しい体系の中に)消えゆき」(«se perdre» )、そしてそれに「同化する」(«s'identifier» )<sup>22)</sup>ことは、たしかに、「私」を宇宙の方へ投げ、またその中へ投げこむ、ある「陶醉感」を意味する。しかし自己の忘却まで及ぶことはない。「私」はいぜんとしてそこに存在する。なぜなら「えもいわれない陶醉感」において「自分を感じている」からである。「自ら消えゆき」また「同化する」という恵まれた意識は、同化作用自体の中で完全に自己を失ってしまうことではない。従って〈第7の散歩〉における「えもいわれない陶醉感」は、〈第5の散歩〉で体験された「自分自身と自分自身の存在」の歓喜のヴァリエーションである。しかしながら、自然と結合した「私」の存在に関っているのだから、前者の段階との相関が後者の神的充足を危うくしないかどうかが問題となろう。』<sup>23)</sup> このようにグイエは〈第7の散歩〉の「陶醉感」と〈第5〉のそれを比較し、前者が後者のヴァリエーションである

と認めながら、「私」の存在と「自然」との結合関係に、両者の分岐点を見ようとするのである。さらに彼は、サン・ピエール島の「抽象的な夢想」においては、「私」は抽象性によって宇宙から引き離されて、自足するが、植物研究に専念する〈第7の散歩〉においては、『夢想は「抽象的」あるいは「非具象的」であるが、抽象性は「全体」として包容された宇宙を、それがいまだ「個別の事物」から遠去ける。そして「私」は、苦もなく所有の対象となることを免がれて、疎外の危険もなく、この〈全体〉に結合することができる。』<sup>24)</sup>とのべ、グイエは「夢想」における「自己」が、〈全体〉として包容された宇宙と一体となる状態を、宇宙的夢想(*«rêverie cosmique»*)と呼ぶのである。

グイエの以上の「夢想」の分析と解明は、まことに緻密であり、異論をさしはさむところがないほど説得的であるが、われわれは、彼の解釈について若干検討を加え、さらにルソーの「幸福」と「自己」の特質を究明したい。

ルソーは〈第5の散歩〉では、『私たちが存在するという感情だけがあって、この感情だけで魂のすべてを満たすことができる。』(本稿18頁参照)とのべ、このような完全な幸福を得るためには、「夢想」の妨げとしての情念を生む「官能的で地上的な一切の印象」を「自己」から遠去けること、過去への愛惜や未来への懸念をもたぬようにすることが必要であった。その結果達した状態こそルソーが「孤独な夢想にふけりながら」味わう「幸福」なのである。要するに「自分自身」に戻ることに、これが「幸福」の絶対条件である。

これに対して、〈第7の散歩〉の場合、「幸福」の条件として、「私」に楽しみを与えない「深遠な思索」や「私」を疲れさす「精神的な仕事」を避けることが必要である。また次にルソーがのべる通り、「個人的なもの」、「肉体の利害に結びつくもの」は「夢想」の妨げとなる。『そうだ、個人的なもの、私の肉体の利害に結びつくものは、何一つとして、私の魂をほんとうに占めることはない。私が自分自身を忘れる時ほど、快く瞑想し、夢みることはない。』<sup>25)</sup>

これらの「幸福」を妨げるさまざまな要因は、〈第5の散歩〉における、「官能的で地上的な一切の印象」などと同一内容ではないであろうか。すなわち「情念」を惹き起すものを避けることこそ、「自分自身」を確立する条件なの



である。この点で両〈散歩〉の構造は同じであると考える。

しかしながら、ここで検討しなければならないことは、前引用の『私が自分自身を忘れる時ほど、快く瞑想し、夢みることはない』というルソーの述懐である。われわれは、先に「自分自身」に立ち戻ることが、「幸福」の絶対条件であると指摘した。従ってこの〈第7の散歩〉における「自分自身を忘れる…」という意味内容が、「自分自身」に立ち戻るとした場合のそれと矛盾しているのではないかという疑問が生じる。しかし、先の〈第7の散歩〉の一節の冒頭に示された『個人的なもの、私の肉体の利害に結びつくもの』が、何を具体的に示していたかを想起すれば、「自分自身」が「自己」のすべてではなく、情念にとらわれた「自己」の一面であることが認められるであろう。加えて、われわれの解釈が妥当であることを示す根拠として、上記引用につづく一節に示された「私」の様態があげられよう。『私はさまざまな存在の体系の中に、いわば溶けこみ、自然全体と同化することに、得もいわれぬ陶醉と恍惚をおぼえる』<sup>26)</sup> この「さまざまな体系」に溶けこみ、「自然全体」に同化するのは、真の「自分自身」以外の何ものであろうか。従ってわれわれは、『自分自身を忘れる…』といわれる場合の「自分自身」は、情念にとらわれた自己であるから、「自分自身」に立ち戻るとした場合の意味内容と矛盾するものではないと考えたい。

この点に関して、マルセル・レイモンは、われわれと同じ地平に立ち、次のように解釈している。『自己に立ち戻るために、まず他からまた〈私〉の中にある他であるものから、遠去かることが必要である。別の言葉でいえば、〈私〉の中にある、自尊心に支配されている一切のものから離れることが肝腎である。しかしついで、ひとたび自己愛が自尊心のあらゆる毒気を免れるにいたった時、自分を忘れること、それは意識がもはや〈私〉を対象とせず、直接それにかかわる何ものも持たないようにすることである。また真正な原理に立ち戻った自己愛が、世界に対する愛との区別がつかないようにしなければならぬ、その実現は容易であろう』<sup>27)</sup> この指摘は正鵠を得ている。この解釈の中心点を明らかにするならば、「自分自身を忘れる」場合の「自分自身」は、「自尊心」に汚された「自己」であり、「夢想」における「自己」の意識には、「世界に

対する愛」と融合する「自己愛」のみが存在するという点である。

従ってグイエが、「自分自身」の内容を論点として、〈第5の散歩〉と〈第7の散歩〉における「夢想」の相違を指摘しているが、両者の「自分自身」の意味内容が異っていることが明白になった以上、「自己中心的夢想」という規定が妥当であるかどうか問題であると思われる。

つぎに、〈第5の散歩〉の「陶醉感」の中には、グイエが指摘しているように、「宇宙的夢想」がないかどうか、同時に検討する必要があるだろう。

ルソーは、サンピエール島を懐かしみ、『私は、そのような愛すべきすべて（青葉、花々、小鳥や幻想的な岸辺）を私の創作に同化させた』<sup>28)</sup>とのべているが、この自然と「夢想による」「創作」(「fictions」)との同化作用は、宇宙との一体化を意味するものではないだろうか。また『社会生活の喧騒が生む一切の地上の情念から解き放たれて、私の魂はしばしばこの大気圏の上に抜け出で…天上の霊たちといまから交わるであろう』<sup>29)</sup>とルソーがのべる時、「自分自身」で充足することが、狭く局限されたものでなく、彼の「夢想」は宇宙的規模に拡大し得るものであることを示していると思う。

プロニスラフ・バチコは、この充足感について次の通り論じている。『あたかも神のように、自ら充足する、という感情は、「私」の制限なき拡張であるとともに、その「私」の集中である。その時、超越の欲求そのものは意識から消えており、意識は、「私」自身の存在、すなわち個人を道徳主体をなす内実を取り去った存在の純粋な経験に還元されている』<sup>30)</sup>と。すなわちバチコによると、ルソーの「自己」は、この「自ら充足する」状態において、道徳意識などの超越への欲求は消えており、「私」自身の純粋な存在経験としてあらわれている。われわれは、この指摘が示唆にとんでいることを認めながら、ルソーの根源的な「自己」の意識が、「自然」と同化するとき、「自己愛」となり、たえず「不幸」にみちびく「自尊心」—「後天的情念」(〈第8の散歩〉)—を免がれて、『魂の平静とほとんどの至福』<sup>31)</sup>を見出したと考えたいのである。

以上両〈散歩〉における「幸福」およびその状態における「自己」の様態を考察したが、〈第7の散歩〉のみでなく、〈第5の散歩〉においても「宇宙的

夢想」のあることが明らかにされたと思う。従って「自己中心的夢想」と「宇宙的梦想」という分類をすることは適切ではないと考えたい。

最後に、いままで考察した両〈散歩〉にとどまることなく、他の〈散歩〉にわれわれの課題を敷衍し、それを作品全体の中での位置づけを試みたい。

〈第7の散歩〉の冒頭に、『私の長い夢の集録がいまはじまったばかりであるというのに、すでに終りに達した感がする』と記されているが、まさしくルソーは同〈散歩〉をもって、彼の最終篇と心づもりをしていたにちがいない。(アンリ・ロディエの指摘するところである。)<sup>32)</sup> しかも、続篇の執筆の難しさを十分承知した上で、〈第1の散歩〉より〈第7〉までを、1777年夏に清書している。マルセル・レイモンは、しかるになぜ〈第8の散歩〉以下が生まれたのかについて、つぎのように論じている。ルソーは、1777年より78年にかけての長い冬の間、採るべき草も花もなく、倦怠にとらわれたため、ふたたび遁走の欲望にとりつかれたのではないか。そして『苦悩が彼をふたたび襲い、彼は自分がただひとりであること、また世間から切り離されていることに気付く。彼が、意識を新しく調べようとするのはそのためである。〈第8の散歩〉は〈第1〉に似ている。というのは孤独な散歩者はふたたび自らを正当化する必要を感じたからである…』<sup>33)</sup>と。

以上のような執筆年代とルソーの精神状況を考慮に入れた上で、われわれは「幸福」感とその状態における「自己」のあり方を位置づける必要があろう。

〈第7の散歩〉につづく〈第8〉は、本論の課題に関して、何らかの変化が見られるであろうか。ルソーはのべている。『…私は幸運のきわみにある人々の一人であるよりも、悲惨のどん底にいる私自身であるほうが、ずっとよいと思う。私ただ一人になってしまった私は、事実、私自身の実態(«ma propre substance»)を自分の糧としている。しかしその実体はつきることはないし、私はいわばからっぽの胃で反芻しているとはいえ、想像力は涸れ(«mon imagination tarie»)、消えはてた私の想念が、私の心情にもはや糧を供してくれないとしても、私は私自身で充足している…(«je me suffis à moi-même»)』<sup>34)</sup> さてわれわれは〈第5の散歩〉の中で、「自己」の特質が、「

on se suffit à soi-même》（本稿18頁引用）であることを見出したが、これは〈第8〉のそれと全く同じ状態であることを知るのである。また上記の〈第8〉の一節に見られる『私は私自身の実体を食っている』状態は、〈第5〉に示された『自己の外部にある何かでもなく、自分自身と自分以外の何かでもない』ものを楽しむ夢想者の状態と比べて、変化が見られない。このようにして、「幸福」を主要なテーマとした各〈散歩〉を通し、「自己」の存在感情や意味内容は同一であるとわれわれは考えたい。しかし本稿1で分析した「幸福」に達する過程での「想像力」のはたらきは、〈第7の散歩〉の場合と同じく、〈第8〉においても、衰えていることが示される。またその過程における他の諸条件についても、〈第8の散歩〉は〈第7〉と同様の、ルソーの意識状態のもとではたらいっていることが指摘されよう。

以上、三つの〈散歩〉を考察したが、「幸福」感、そして「自己」認識とその内容は、歳月のうつりかわりにも拘わらず、一定し、同一であること、しかし「幸福」に達するための過程における条件また方法については、変化が見られることを指摘してこの小論を結びたい。

- 1) Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres Complètes*, Tome 1, éd. de la Pléiade, Gallimard, 1959, p. 1020.
- 2) *Ibid.*, p. 1041.
- 3) *Ibid.*, pp. 1043-1044.
- 4) *Ibid.*, p. 1046
- 5) 6) 7) 8) *Ibid.*, pp. 1047-1048.
- 9) 10) *Ibid.*, p. 1046.
- 11) *Ibid.*, p. 1047.
- 12) *Ibid.*, p. 1049.
- 13) *Ibid.*, p. 1061.
- 14) 15) *Ibid.*, p. 1062.
- 16) *Ibid.*, pp. 1062-1063. Une rêverie douce et profonde s'empare alors de ses sens, et il se perd avec une délicieuse ivresse dans l'immensité de ce beau système avec lequel il se sent identifié.
- 17) *Ibid.*, p. 1068.
- 18) *Ibid.*, p. 1073.
- 19) *Ibid.*, pp. 1065-1066.
- 20) 21) Henri Gouhier: *Les Méditations métaphysiques de Jean-Jacques Rousseau*, Edition, Plon, 1971, p. 104.
- 22) 本稿 p. 20 および注 16) 参照.
- 23) Henri Gouhier, *Op. cit.*, pp. 104-105.
- 24) *Ibid.*, p. 105. ギュイエが、この引用の中で、「抽象的夢想」とのべているのは、〈第5の散歩〉の終りの一節に、『抽象的で単調な夢想の魅力に、私はそれを活気づけるような魅惑的なさまざまの心象を加える』という「夢想」の状態を指しているのである。彼の解釈によれば、「抽象的夢想」は〈第7の散歩〉にもあらわれるが、〈第5〉と異なるのは、「特殊な事物」が「自己」から剥離し、そのことによって「自己」が〈全体〉と結合するところにある。このようにして〈第7〉の「陶醉感」が宇宙の性格を帯びていると彼は結論するのである。

しかし、〈第5〉における「抽象的夢想」は、「自己」が「宇宙」から切り離されたところでなされる経験にとどまるものであろうか。われわれはこの問題を本稿2において解明したい。

- 25) *Op. cit.*, *Septième Promenade*, p. 1065. Non, rien de personnel, rien qui tienne à l'intérêt de mon corps ne peut occuper vraiment mon âme. Je ne médite, je ne rêve jamais plus délicieusement que quand je m'oublie moi-même.
- 26) 注19) 参照。
- 27) *Op. cit.*, *Introduction*, p. XC.
- 28) *Ibid.*, p. 1048.
- 29) *Ibid.*, pp. 1048-1049.
- 30) Bronisław Baczko: *ROUSSEAU Solitude et communauté*, Mouton, 1970, p. 247.
- 31) *Op. cit.*, p. 1080.
- 32) Jean-Jacques Rousseau: *Les Rêveries du promeneur solitaire*, Edition Henri Roddier, coll., Classiques Garnier, 1960, p. LXXIV.
- 33) Jean-Jacques Rousseau: *Les Rêveries du promeneur solitaire*, Edition critique par Marcel Raymond, coll., T. L. F., Droz, p. XLIX.
- 34) *Op. cit.*, p. 1075.

## Résumé

### **Quelques remarques sur «le bonheur» et «le soi» dans *les Rêveries du promeneur solitaire* de Jean-Jacques Rousseau**

Rousseau donne une subtile recherche sur «le bonheur» et «le soi» dans la *Cinquième Promenade*, ainsi que dans la *Septième*. L'analyse de ces deux *Promenades*, pourrait donc nous permettre mieux comprendre le contenu du «bonheur» et l'aspect du «soi.»

Dans cet article, nous allons éclaircir d'abord comment Rousseau a pu parvenir à un état du «bonheur» et quel est l'aspect du «soi» dans cet état.

Le processus pour atteindre l'extase de la rêverie dans chacune de ces deux *Promenades* nous montre qu'il existe une certaine différence dans les deux *Promenades*. On pourrait dire que dans la *Cinquième*, le rêveur est plutôt passif avec la nature, comme le suggère ces phrases de l'auteur au cours de la recherche du bonheur: «...l'uniformité du mouvement continu qui me berçait, qui sans aucun concours actif de mon âme ne laissait pas de m'attacher...» En même temps, nous pouvons signaler que Rousseau considère la fonction de l'imagination comme un des éléments principaux dans la formation du «bonheur», et que l'imagination se fait avant tout à l'intérieur du rêveur. Mais dans la *Septième*, par contre, la force de l'imagination s'affaiblit —plus tard Rousseau demandera à la nature de venir purifier son imagination—, et un instinct du rêveur fixe son «attention sur les objets» qui l'environnent, et va jusqu'à imposer le silence à son imagination et à la circonscrire «pour qu'il (un contemplateur) puisse observer

par parties cet univers qu'il s'efforçait d'embrasser.» Le rêveur a fixé son «attention» sur la nature. Ceci nous semble indiquer qu'il est devenu actif aux objets extérieurs, c'est-à-dire au monde. L'apparition de cette «attention» qui se rapportera à la «botanique» doit être considérée comme un changement digne d'attention. Telle est la différence la plus caractéristique dans les deux *Promenades*.

Nous remarquons, tout de même, qu'il existe un parallélisme concernant la disposition du rêveur dans laquelle il s'efforce de ne pas être troublé par toutes les passions, et que dans l'extase le sentiment et la conscience du rêveur ne changent pas au cours de ces deux *Promenades*: la *Cinquième* et la *Septième* qui sont écrites successivement en ordre chronologique.

Ensuite nous allons aborder la question du «bonheur» et du «soi».

Dans la *Cinquième*, Rousseau écrit: «... tant que cet état dure on se suffit à soi-même comme Dieu.», mais dans la *Septième*, il affirme que «je ne rêve jamais plus délicieusement que quand je m'oublie moi-même.» Ces deux aspects de «soi» dans une rêverie, celui de la suffisance à «soi» et celui de l'oubli de «soi» nous semblent s'opposer. Nous citons par exemple, l'interprétation de Henri Gouhier qui définit la rêverie de la *Cinquième* comme «celle d'une extase *égotiste*», en nous relevant sur la phrase de Rousseau: «on se suffit à soi-même», et la rêverie de la *Septième* comme «celle de l'extase à la fois *égotiste* et *cosmique*», en s'appuyant sur la phrase: «Une rêverie douce et profonde s'empare alors de ses sens, et il se perd avec une délicieuse ivresse dans l'immensité de ce beau système avec lequel il se sent identifié.»

Nous aurons donc à nous demander si la rêverie de la *Cinquième* ne comporte pas le caractère *cosmique*, comme Gouhier le souligne, et que cette interprétation est la seule moyen pour régler les deux aspects de



«soi» qui semblent tout au moins contradictoires l'un l'autre. L'analyse du contenu de «soi» dans la *Septième*, on nous fait voir que «soi» que l'on doit oublier est celui qui est dominé et souillé par la société, à savoir, tout ce qui provient de l'amour-propre comme l'annonce la phrase qui précède la citation ci-dessus: «Non rien de personnel, rien qui tienne à l'intérêt de mon corps ne peut occuper vraiment mon âme.»

D'ailleurs nous nous apercevons que dans la *Cinquième*, «le soi» est dépouillé de «toutes les impressions sensuelles et terrestres.»

Il en résulte que «le soi» dans la *Septième* peut se retourner au «soi» naturel en s'oubliant, et que dans les deux *Promenades*, la notion du «soi» se réduit à une seule définition.

Et puis nous examinons si «le soi» dans la *Cinquième* ne comporte pas le caractère *cosmique*. Comme Rousseau écrit «...j'assimilais à mes fictions tous ces aimables objets...» et en outre «Délivré de toutes les passions terrestres qu'engendre le tumulte de la vie sociale, mon âme s'élancerait fréquemment au dessus de cet atmosphère», ces passages nous suggèrent que «le soi» dans cette *Promenade* se trouve même identifié avec la nature.

Nous aurons ainsi à nous persuader que la suffisance à «soi» dans la *Cinquième* et l'oubli de «soi» dans la *Septième* ne sont pas contradictoires. Par conséquent, la définition qui dit que, seule, la rêverie de la *Septième* porte le caractère *cosmique* nous paraît peu accessible.